

令和3年度

劇場・音楽堂等機能強化推進事業

(劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業)

自己点検報告書

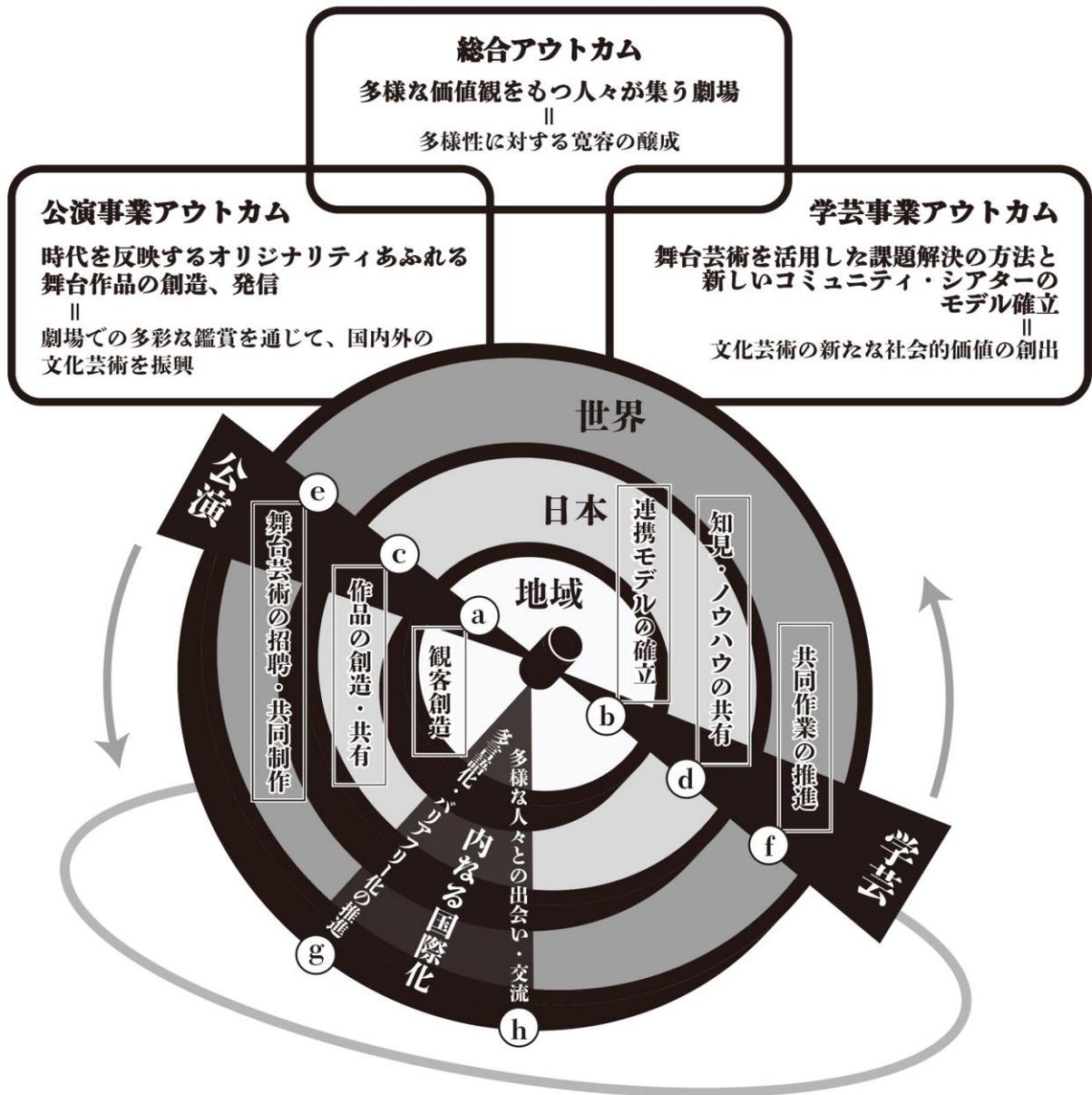
団 体 名	公益財団法人せたがや文化財団
施 設 名	世田谷文化生活情報センター（世田谷パブリックシアター）
助 成 対 象 活 動 名	共に生きる場としての劇場：多様性を巻き込む同心円プロジェクト
助 成 期 間	5 (年間)
内 定 額	59,973 (千円)

1. 事業概要

(1) 事業計画の概要

全体図（概念図）

(事業名) 共に生きる場としての劇場：多様性を巻き込む同心円プロジェクト



(2) 令和3年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	狂言劇場 その九	令和3年6月18日～ 6月27日	企画・構成・総合演出：野村萬斎 出演：野村万作、野村萬斎、石田幸雄、野村裕基 他	目標値	3,150
		世田谷パブリックシアター		実績値	2,634
2	上村聡史演出作品 『森 フォレ』	令和3年7月6日～ 7月24日	作：ワジディ・ムワウド 演出：上村聡史 出演：成河、瀧本美織、岡本健一、麻実れい 他	目標値	7,599
		世田谷パブリックシアター		実績値	4,995
3	MANSAI 解体新書 その参拾弐	令和4年2月24日、 2月27日	企画・構成・出演：野村萬斎 出演：野村萬斎、野村裕基、吉見一豊、若村麻由美 他	目標値	450
		世田谷パブリックシアター		実績値	615
4	栗山民也演出作品『彼女を笑う人がいても』	令和3年12月4日～ 12月18日	作：瀬戸山美咲 演出：栗山民也 出演：瀬戸康史、木下晴香、渡邊圭祐、近藤公園、阿岐之将一、魏涼子、吉見一豊、大鷹明良	目標値	7,087
		世田谷パブリックシアター		実績値	7,052
5	白井晃演出作品「マーキュリー・ファー Mercury Fur」	令和4年1月28日～ 2月16日	作：フィリップ・リドリー 演出：白井晃 出演：吉沢亮、北村匠海、大空ゆうひ 他	目標値	9,450
		世田谷パブリックシアター		実績値	13,516
6	日仏国際共同制作ダンス 磨赤兒×フランソワ・シェニヨー『ゴールドシャワー』	令和3年10月15日～ 10月17日	構成・振付・美術・出演：フランソワ・シェニヨー、磨赤兒	目標値	840
		世田谷パブリックシアター		実績値	963
7	アートタウン海外招聘公演	助成対象外・中止※	国際交流基金の受託事業となったため助成対象外および新型コロナウイルスの影響により事業中止。	目標値	900
		—		実績値	—
8	小山ゆうな演出作品『愛するとき 死するとき』	令和3年11月13日～ 12月5日	作：フリッツ・カーター 演出：小山ゆうな 出演：浦井健治、高岡早紀 他	目標値	3,488
		シアタートラム		実績値	4,680
9	せたがやこどもプロジェクト フォルモサ・サーカス・アート『悟空』	令和3年7月28日～ 7月29日	演出：李宗軒 出演：フォルモサ・サーカス・アート 演出・振付：目黒陽介 振付・出演：吉田亜希 油布直輝 安岡あこ	目標値	900
		世田谷パブリックシアター		実績値	517

10	せたがやこどもプロジェクト『せたがや 夏いちらくご』	令和3年8月8日	出演：春風亭一之輔、翁家社中、林家正楽	目標値	800
		世田谷パブリックシアター	お囃子：井上りち	実績値	575※
11	せたがやこどもプロジェクト『Jazz for Kids』	令和3年8月15日	出演：日野皓正、多田誠司、金澤英明 他	目標値	420
		世田谷パブリックシアター		実績値	463※
12	ハッチアウトシアター 2021 子どものためのリーディング公演+ワークショップ	令和3年12月10日～12月12日	上演台本作：神野誠人 演出・ファシリテーター・橋本昭博	目標値	300
		シアタートラム	出演：有吉宣人 佐久間麻由 田村優依 野口卓磨 渡邊まな実	実績値	263
13	観客育成プログラム『舞台芸術のクリティック』	中止※	新型コロナウイルスの影響により事業中止。	目標値	110
		—		実績値	—※
14	Technical Theatre Training Program 2021 舞台技術講座	令和3年10月26日～10月29日 令和4年1月28日	講師・進行：世田谷パブリックシアター技術部スタッフ、スリーエムジャパンイノベーション株式会社 石神裕司 他	目標値	250
		世田谷パブリックシアター シアタートラム		実績値	167
15	移動劇場 @ホーム公演	令和3年6月 令和4年2月8日	脚本・演出・撮影：ノゾエ征爾 出演：山本光洋、たにぐちいくこ、田中馨、ノゾエ征爾	目標値	750
		世田谷区内福祉施設		実績値	25※
16	フリーステージ	令和3年4月28日～4月29日、 5月1日～5日	出演：世田谷区民を中心とした、音楽教室、ダンス教室、サークル、任意団体など	目標値	2,000
		世田谷パブリックシアター シアタートラム		実績値	467※
17	世田谷アートタウン『三茶 de 大道芸』	令和3年10月15日～10月17日	プロデューサー：橋本隆雄 出演：加納真実、チャラン・ポ・ランタン、Funny Bones 他	目標値	200,000
		シアタートラム 他		実績値	4,100※
18	子どものためのワークショップ「せたがやこどもプロジェクト 夏休みワークショップ」	令和3年7月28日～8月27日	進行役：すずきこーた、有吉宣人、富永圭一、田崎葵、大道朋奈、青山公美嘉、柏木陽、とみやまあゆみ	目標値	450
		世田谷パブリックシアター 稽古場		実績値	447

19	学校のためのワークショップ『かなりゴキゲンなワークショップ巡回団』	令和3年5月～令和4年3月	進行役：すずきこーた、富永圭一、柏木陽、とみやまあゆみ、青山公美 嘉 他	目標値	5,100
		世田谷区内小中学校		実績値	3,732
20	地域の物語	令和4年1月8日～3月20日	進行・構成：柏木陽、金川晋吾、関根信一、花崎攝、山田珠実	目標値	570
		世田谷パブリックシアター 稽古場		実績値	227※
21	学芸事業出版	令和3年10月～令和4年3月	執筆・協力者等：世田谷パブリックシアター学芸事業担当者、花崎攝、開発彩子、金川晋吾、世田谷区社会福祉協議会、下馬あんしんすこやかセンター	目標値	—
		—		実績値	—

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>事業計画に必要な構成要素が有機的に連関し、当初の予定通りに事業が進められているか。</p> <p>「計画工程表」における1年目の計画の達成状況は以下のとおりである。新型コロナの影響は依然として大きいものの、これまでに蓄積してきた知見や経験を最大限に活用して柔軟な対応をおこなうことでミッションの達成に努めた。結果として、5年間の補助対象期間における事業実施の地ならしをするという初年度の計画は、下記「8.」などを除き、相当程度達成できたものと考えている。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 「地域」→「公演」：世田谷区民向けの優待事業として「せたがやアーツカード」の発行と各種優待をおこなっているが、令和4年度が劇場の開場25周年となることも踏まえて「地域の常連客」の育成のための広報戦略を策定した。令和4年4月より実施を予定している。2. 「地域」→「学芸」：地域連携サポートセンター機能の確立に向け、「地域の物語」（事業番号20。以下カッコ内は事業番号）において地域包括支援センター等と連携し、区内下馬地区で高齢者向け事業を実施した。3. 「日本」→「公演」：芸術監督企画『狂言劇場 その九』（1）、『MANSAI 解体新書』（3）をはじめ、新進気鋭の劇作家と日本演劇界の重鎮の顔合わせ（4）や勢いのある落語家による寄席企画（10）など、当劇場ならではの企画をおこなうとともに、ツアー公演（2, 4, 5, 6, 8）を積極的に実施して成果の共有に努めた。4. 「日本」→「学芸」：上記2. の事業を特集した冊子を作成して無料配布し、事業実施を通じて得られた知見やノウハウを広く共有した。また、劇場ホームページ上でもPDF形式で公開し、同様のテーマに関心を持つ方々が手軽にダウンロードして利用できるようにした。5. 「世界」→「公演」：『森 フォレ』（2）や『マーキュリー・ファー』（5）、『愛するとき 死するとき』（8）など、世界の最先端の劇作家による多様な翻訳戯曲を紹介するとともに、コロナ禍の困難を乗り越えて日仏共同制作による『ゴールドシャワー』（6）を日本初演した。『悟空』（9）では、台湾からの渡航が不可能となったため、作品の映像上映と日本のアーティストによる関連上演に切り替えるなど、制限の中でミッションを達成すべく最大限の努力をおこなった。6. 「世界」→「学芸」：「地域の物語」（20）において計画していたシンガポールとの共同作業は新型コロナの影響により断念せざるを得なかったが、オンラインで議論を重ね、日本でのワークショップに反映させた。関係者の熱意と善意により、今後につなげていくための足場を築くことができた。7. 「内なる国際化」→「公演」：『狂言劇場 その九』（1）の一部の回で英・中国語字幕をタブレット端末で提供した。さらに全7回公演のすべての回で聴覚障害者向けの日本語字幕、視覚障害者向けの音声ガイド、手話通訳のいずれかを実施し、「バリアフリー・多言語対応があるのが当たり前」というパラダイムシフトを図った。8. 「内なる国際化」→「学芸」：新型コロナの影響により、「地域の物語」（20）で企画した地域におけるフェスティバルは関係者のみに公開することとなった。また在住外国人の参加を見込んだ大道芸フェスティバル（10）も実施形態を大幅に見直さざるを得なくなるなど、大きな影響があった。
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>「創造性」の項目で詳述するとおり、公演事業は各種劇評で高い評価を得るとともに、複数の演劇賞を受賞している。特に、演目選定について「公共劇場だからこそ可能であった」との評価が多くみられた。</p> <p>「老いとケア」をテーマとして実施した「地域の物語」には、協力を得た地域包括支援センターを含む社会福祉関係者からの期待が高く、持続的な協力関係を構築していきたいとの声が寄せられている。日本社会における喫緊の課題であるテーマへの関心も高く、共同通信社が記事を配信し、各地の新聞に掲載された。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成し、アウトカムの発現は可能か。

「インプット」となったのは、設置主体である世田谷区からの補助金、劇場・音楽堂等機能強化推進事業助成金、その他各種助成金、寄付金、事業運営収入からなる事業実施資金および劇場が有する専門的人材である。これを受け、以下の「アクション」「アウトプット」を展開した。

1. 「地域」→「公演」：U-24（アンダー24）年間入会者数は781人、友の会会員数は4,638人で、いずれも目標を上回ったが、コロナの影響を大きく受けた指標も多かった。せたがやアーツカード会員向けのチケット販売は1,738枚となり、目標の2,500枚を下回った。これは緊急事態宣言の発出による収容率制限の影響が大きかったと思われる。地域団体参加型の事業である「フリーステージ」（16）は、中止となった前年度の参加予定団体に参加を打診する形としたため、設定した指標を用いた評価が不可能となった。また、地域協働型フェスティバルである「三茶 de 大道芸」（17）は街中での開催を中止し、シアタートラムでの上演を中心とする構成に変更したことから、入場者・参加者数は4,100人と目標に遠く届かない結果となった。
2. 「地域」→「学芸」：ワークショップ・レクチャーを179回実施して5,923人の参加者があり、目標を達成した。他方、日数は延べ163日で目標を下回った。これは、感染症対策として1回あたりの人数を絞ったワークショップを回数を増やして実施する方針を採用し、1日のうちに複数回を実施したことが要因である。地域連携プログラムは3事業を実施し、目標を達成した。参加者へのヒアリング調査については、コロナ禍の状況に鑑み、実施を見送った。
3. 「日本」→「公演」：主催公演3本（1, 3, 4）を実施し、平均入場者率は458.4%となった。これは「MANSAI 解体新書」（3）の事業内容を変更し、別日にパフォーマンスを実施した影響が大きく、それを除いた平均入場者率は91.6%である。このうち「彼女を笑う人がいても」（4）はツアー公演をおこなった。本年度は、劇場のプログラミングにおいて翻訳作品に注力したことから、このカテゴリーに分類される本数が少なくなった。また、コロナ禍の状況でコース数を従来の5から4に減らし、各コースの人数を絞ったため、インターンの受け入れ数は11人となった。メールマガジンの送付は年間205,248人、Twitterのフォロワー数は27,913人となり、いずれも目標を達成した。他方、アンケートは感染症対策として引き続きオンラインで実施しているが、回収率が極めて低い状態が続いており、模索を続けている。
4. 「日本」→「学芸」：冊子『CarroMag（キャロマグ）』を1回発行し、目標を達成した。また、ワークショップを実施する学校の新規開拓については、2件の新規の依頼があり、こちらも目標を達成した。
5. 「世界」→「公演」：海外招聘公演、国際共同制作作品、海外戯曲の翻訳上演作品を6本（うち補助対象事業2, 5, 6, 8, 9）上演し、対象事業の平均入場者率は103.0%で目標を達成した。また、補助対象事業のすべての作品が国内ツアーをおこない、成果を共有した。
6. 「世界」→「学芸」：「地域の物語」（20）で実施予定であった海外との共同作業は、コロナの影響で中止せざるを得なかった。今後、状況を見ながら再開の可能性を探りたい。
7. 「内なる国際化」→「公演」：舞台説明会はコロナの影響で実施できていないものの、補助対象の演劇公演事業（1, 2, 3, 4, 5, 8, 10）において音声サポートの貸し出しをおこなった。また、聴覚障害者向けに事前に台本を貸し出すサービスをすべての公演において準備し、3公演（4, 5, 8）において貸し出しをおこなった。また、「狂言劇場」（1）においては、「創造性」の項目で詳述するとおり、多言語字幕タブレットや音声ガイドの提供をおこなった。タブレットの利用率は76%（50台のうち38台利用）で、目標を達成した。
8. 「内なる国際化」→「学芸」：「地域の物語」における海外との共同作業や、「三茶 de 大道芸」において在住外国人の参加を予定していたが、先述のとおり、いずれも実施形態が大幅に変更となり、実現しなかった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

すべての事業において、ほぼ計画通りの期間で事業を実施した。当劇場においては、平成 29 年 12 月に策定した「世田谷パブリックシアター劇場経営に関する基本方針」に基づき、補助金の対象事業となる主催公演のほか、提携公演、貸館公演の事業期間を決定している。それぞれの公演形態の年間比率に基準値を設けてスケジュールを決定することで、プログラムのバランスと一貫性を保つと共に、それぞれの公演形態の相乗効果による多様性を実現している。これにより主催事業の特質を際立たせることが可能となり、効率的なアウトプットの達成につながっている。入場者数の目標設定も、上記によって導き出された事業期間に基づいて設定している。有料公演事業（事業番号 1～12）の入場者率平均は 113.01%（ただし年度途中で事業内容・回数を変更した『MANSAI 解体新書』（3）の影響が大きく、それを除いた平均は 96.78%となる）で、想定を上回る観客を集めることができた。緊急事態宣言により客席収容率が 50%に制限された中でも、情報を綿密に収集し、適切な形で券売をおこなうように留意したこと、大型事業が集中した秋以降は収容率が 100%となったことが主な理由である。他方、学芸事業（事業番号 14～21）ではコロナの影響が大きく、入場者率平均は 43.99%にとどまった。特に、「移動劇場@ホーム公演」（15）は高齢者施設を訪問しての上演がほぼ不可能となり、年度末に 1 回だけの試演を行うにとどまった。また「フリーステージ」（16）は緊急事態宣言発出により無観客での上演となり、「三茶 de 大道芸」（17）は昨年度に引き続いて街中での実施を断念して劇場（シアターラム）で上演せざるを得なくなったことで、いずれも想定を大幅に下回る入場者・参加者率となった。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

公演事業に関しては、コロナ禍の状況の中で、緊急事態宣言による収容率制限や観客の意識の冷え込みといった不確定要素が大幅に増大している。その結果、適切な事業費を設定するための基礎的な要素であるチケット収入の見込みをたてることがきわめて難しくなっている。そのような中でも、上述の通り、収容率制限に関する情報を適切に収集してチケットの販売計画をたてることによって安定した収入を確保する努力をおこなった。また、いたずらに入場料を上げることを避け、補助金を活用して補助対象事業のチケット料金を廉価に抑えている。また、『マーキュリー・ファー』（5）においては、予想を大きく上回る収入があったが、これはアンダースタディを準備しておいたことで、出演者の一人が発熱（コロナ感染ではないことが判明）した際にも代役を立てて公演を継続することができたことが大きく寄与している。同公演では近年悪質なケースが散見されるチケットの転売対策にも取り組み、明らかに転売されたチケットでの入場をお断りする措置をとった。これらの対応は人的にもコスト的にも大きな負担となるが、常に公演が止まる可能性があるコロナ禍の状況への対応や、チケットの適切な販売による収入の確保を通じた劇場の安定的な運営のためには避けて通れない道であると認識している。学芸事業についても、先述のようにコロナの影響は甚大であった。しかし、そのような中でも、参加者の確保について工夫の余地がある事業については、さまざまな対応をおこなった。「夏休みワークショップ」（18）では感染対策として定員を減らした分、実施回数を増やすことで参加者数を確保する工夫をした。実施回数を増やすことは進行役や劇場スタッフの負担増、経費増に直結するが、可能な限り効率的な方法を工夫することでコストをおさえ、旺盛な需要に応えるために最大限の努力をおこなった。「ワークショップ巡回団」（19）についても、コロナ感染拡大を危惧する学校側に対して、実施時の感染症対策について丁寧に説明をおこない、十分な理解を得たうえで事業を実施することで参加者数の大幅な減を避けることができた。子どもたちが集団で活動する機会を失っている中で、学校でのワークショップ実施への潜在的な需要は大きいことから、コロナ禍の状況に対応した効率的な事業実施を図った。

(4) 創造性

自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性等に優れている（と認められる）か。

公演事業の「日本」のレイヤーにおいては、「今、ここで上演することに意義があるか」という観点を最重視し、日本の演劇界にインパクトを与えうるプログラム編成をおこなうことを目指している。

『彼女を笑う人がいても』(4) について「近年めずらしく内容の充実した舞台だった。…社会へ向ける瀬戸山の眼差しの確かさが窺える」(谷岡健彦、『テアトロ』2022年3月号)といった劇評が出たことは、こうした姿勢が正しく理解されたことを示していると思われる。

同作品の劇作の瀬戸山美咲は、当劇場が実施してきた若手実演家育成事業「シアターラム・ネクストジェネレーション」に選出されて以来、当劇場と共同作業を積み重ねてきた。そうした積み重ねの上に今回の作品が創造されており、『悲劇喜劇』誌において「(この作品の)制作は公共劇場の世田谷パブリックシアターで、若い才能の育成に積極的ですよ」(祐成秀樹)、「公共劇場と作家のあり方を新しく構築していただきたいです」(みなもごろう)、『悲劇喜劇』2022年3月号)といった評価と期待が示されたのは、当劇場が積み重ねてきた実践の独自性、先導性への認識ゆえであると思われる。

また、『狂言劇場 その九』(1)においては、多言語・バリアフリー対応で新たなチャレンジをおこなった。公演期間中、(a) 視覚障害者のための解説付き音声ガイドを提供する回(1回)、(b) 聴覚障害者のための日本語字幕および非日本語話者向けの英語・中国語字幕を表示するタブレットの貸し出しを実施する回(2回)、(c) 聞こえにくい方のための音声サポートを実施する回(4回)を設定し、全6回公演のすべての回で、最低1種類のサポートがあるという状態を作り出し、「サポートがあることが当たり前」というパラダイムシフトを試みた。また、(a)と(b)の回については、都内の特別支援学級の教員、(b)の回には近隣に所在し、外国人留学生も多いテンプル大学日本校の教員を招待し、実際に体験していただく機会を設けた。「生徒・学生にも紹介したい」との声をいただくとともに、「英語・中国語字幕も有効だが、いわゆる『やさしい日本語』で字幕を出すことを考えてもよいのではないか」など、具体的なお意見をいただくことができた。今後もこうしたチャンネルを通じて裾野を広げていく努力を続けたいと考えている。

「世界」のレイヤーでは、「海外の優れた戯曲を翻訳上演し、そこに描かれた多様な価値観を紹介する」という目標を掲げている。他者を理解することは簡単な作業ではなく、多大な努力が求められる複雑な作業である。そうした複雑さを内包した戯曲をあえて選択し、日本に紹介することは、公共劇場ならではの取り組みであると考えている。

劇評でも、そうした当劇場の姿勢を評価するものが目立った。『森 フォレ』(2)では、「こういうものにチャレンジしていくという精神は、公共劇場の使命として続けてほしい」(酒井誠)、「個人の歴史が社会全体の歴史と分かち難く結び付いているというところは、日本人にとってもそうなので説得力ある作品ですね」(小田島創志)、『悲劇喜劇』2021年11月号)との評があった。また、『愛するとき死するとき』(8)については「いろんな感情を抱かせてくれた作品でした。小山さんも健闘しました」(祐成秀樹)、「よくこの作品を日本で上演したなと感心しました」(みなもごろう)、『悲劇喜劇』2022年3月号)との評があった。

また、昨年度は新型コロナの影響で全て中止となった海外招聘・共同制作も、さまざまな制約は残るものの、一部再開することができた。フランスで注目を集める振付家・ダンサーと、日本を代表する舞踏家の顔合わせとなった『ゴールドシャワー』(6)は、「水と油と見える二人が、絶妙な化学反応をおこし、性と愛、生と死の深淵をえぐりだした。…それほど大仕掛けではないのに奥深く、なにより観客の腹の底に爪痕を残す作品だった」(『Dance Magazine』11月号)と高い評価を受けた。

一方、『悟空』(9)においては台湾のカンパニーの渡航が不可能となったため、急遽上演予定作品の映像上映と、日本のサーカスアーティストたちが同作品にインスパイアされて制作した短編作品を組み合わせる形式に変更し、制約の中でも「オリンピック開催期間中に、現代サーカス公演を通じて人間の身体能力と表現の可能性を提示する」という事業の目的の達成を図った。

学芸事業においては、従来から力を注いできた教育機関との連携に加え、劇場法第 16 条にも掲げられている福祉施設や医療機関との連携への道筋をつける端緒となる取り組みをおこなったことが特筆される。「地域の物語」(20)においては、社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会、社会福祉法人世田谷ボランティア協会と事業実施に向けて精力的に協議をおこない、協力関係を確立することができた。「妥当性」の項目に記載したように、同事業は新型コロナの影響を受けて計画を大きく変更せざるを得なかったが、こうした関係性は、今後の事業展開に大いに寄与するものとなると期待される。また、シンガポールの劇団 Drama Box との協働も実現しなかったが、同劇団とはオンラインで「老いとケア」のテーマでディスカッションを続け、その内容は 2022 年 3 月の発表会にも反映された。ディスカッションには横浜・寿町で低所得者を対象としたケアを実施している病院の関係者を招いて議論に参加してもらうなど、医療関係者との連携の可能性も見え始めている。

また、「ハッチアウトシアター」(12)では、従来実施してきた若手演劇人育成事業「シアター ترام・ネクストジェネレーション」に代わる企画として、次世代を担う若い実演家に、上演とワークショップを組み合わせた新しい形式による作品創造の機会を提供した。当劇場は、公演事業と学芸事業を車の両輪として事業を実施しているが、本企画はその特質を存分に活かし、「両輪」それぞれの要素を組み合わせることで新しい演劇の形を提示するものとなった。当日の運営を担った学生ボランティアからは「終演後、演劇部仲間の子供達が『活動にも活かしていきたい』と言って、こういった形で若い世代に舞台芸術の文化が継承されていくのだと実感した」「ワークショップと芝居が同時進行する形態の公演は珍しいが、参加者が一体となって1つの作品を作り上げる実感を得ることができ、お客様の満足度も非常に高かったと感じた」といった声が聞かれた。

自己評価

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながっている（と認められる）か。

本年度の上演作品も、それぞれ高い評価を得ることができた。例えば、劇評家はその年をふりかえる記事においても、当劇場の作品をベストに推す声が多くあった。結城雅秀が『森 フォレ』(2)を「昨年最大の収穫である」(『テアトロ』2022年3月号)とする一方で、山田勝仁は『彼女を笑う人がいても』(4)を「気鋭の劇作家・瀬戸山美咲と日本を代表する演出家・栗山民也が今の時代状況に対して真正面から挑んだ骨太の作品。今年のベスト作品といってもいい舞台だった。…テーマ、脚本、演技、演出ともに今年の掉尾を飾るにふさわしい舞台といえよう。★★★★★」(日刊ゲンダイ 2021年12月25日)と高く評価した。日本劇団協議会の『JOIN』誌の「私が選ぶベストワン 2021」特集(2022年3月号)においては、87人の回答者のうち3割にあたる26人が、上記2作品や日仏共同制作ダンス公演『ゴールドシャワー』(6)、『愛するとき 死するとき』(8)を作品やスタッフ等、各カテゴリーのベストに選出している。

こうした高い評価は多数の演劇賞の受賞にもつながっている。『ゴールドシャワー』の成果により磨赤兒が第76回文化庁芸術祭賞 舞踊部門 関東参加公演の部で大賞を受賞したほか、『森 フォレ』演出の上村聡史は第56回紀伊国屋演劇賞 個人賞、第29回読売演劇大賞 最優秀演出家賞を受賞した。また、同作品で音楽を担当した国広和毅、美術の長田佳代子がそれぞれ第29回読売演劇大賞 優秀スタッフ賞を受賞した。さらに『彼女を笑う人がいても』は第66回岸田國士戯曲賞最終候補作品となった。

(5) 持続性

自己評価

事業計画を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

劇場を持続的に管理運営するための基本的な指針として、平成 29 年 12 月に「世田谷パブリックシアター劇場経営に関する基本方針」、平成 30 年 1 月には「公益財団法人せたがや文化財団人材活用計画」を策定した。職員の登用や昇任に関する制度を整備し、財団全体の基幹業務を担う「総合職員」と、制作や技術等の専門性の高い業務に従事する「専門職員」（いずれも無期雇用）を配置した。平成 30 年度より、有期雇用の「契約職員」等の雇用形態から内部登用による専門職員への切り替えを実施している。また、平成 31 年度より、専門職員の主任昇任を実施している。令和 3 年度においては、新たに契約職員から専門職員に 1 名登用するとともに、主任への昇任を 3 名、管理職員への昇任も 1 名おこなった。

他の公共劇場や関連団体との連携強化にも力を注いでいる。当劇場で企画制作した作品のツアー公演を全国各地の公共劇場において実施し、成果の共有を図っている。その際には劇場・音楽堂等間ネットワーク強化事業補助金も活用している。また、劇場、音楽堂等連絡協議会事務局に当劇場職員が参加し、公共劇場間の情報共有や連携促進に積極的に取り組んでいる。さらに、コロナ禍を契機として設立された緊急事態舞台芸術ネットワークにも当劇場スタッフが参画しており、主導的な役割を担っている。

財政面においては、企業からの協賛金および各種財団等の助成金を戦略的に獲得することで、持続的・安定的な事業実施を目指している。各企業が重視する分野をきめ細かくリサーチして積極的な提案をおこなうとともに、助成金についても常に情報収集をおこない、適切な申請をおこなう体制を整えている。

持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるか。

年度途中で館長が交代し、さらに令和 4 年 4 月に芸術監督が野村萬斎氏から白井晃氏に交代することが発表されるなど、当劇場は大きな節目の時期を迎えている。新館長・新芸術監督のもと、新しいアプローチで事業を進めていく一方で、「共に生きる場としての劇場：多様性を巻き込む同心円プロジェクト」における持続的なアウトカムの発現と定着を図ることの重要性を改めて確認し、組織としての取り組みを続けていく。世田谷区の外郭団体行動計画に従い、PDCA サイクルを機能させるべく、事業の計画時及び実施後に文化生活情報センター幹部会（館長、副館長、各部長、マネージャーが出席）において検討・評価を行う体制を確立している。さらに、「人材活用計画」を基に、職員を適切に処遇することでモチベーションの向上と人材育成を図り、持続的に事業を展開し、アウトカムの発現・定着に向け、組織体制の強化に一層取り組んでいく。

また、劇場としての持続性を担保するための土台として、「世田谷パブリックシアター友の会」の存在は大きな意味があると認識している。「友の会」は、劇場開場当初から、財団との協定により相互協力及び支援を実施しており、「特別会員」（年会費一口 50,000 円）、「賛助会員」（年会費一口 10,000 円）、「一般会員」（入会金 500 円、年会費 3,000 円）の 3 種類を設定している。特典として先行販売やチケットの割引、劇場カフェで使えるコーヒーチケット配布等のサービスを提供してきたが、(1) 人気公演の際に会員数が急増する現象が発生し、特典チケットの入手が困難となる状況が生まれていること、(2) 長引くコロナ禍の中で劇場カフェの閉鎖が続くなど、一部特典の提供が難しくなっていること等の問題が発生してきている。

本年度は、こうした状況を踏まえ、友の会のあり方について様々な検討をおこなった。友の会設立 25 周年ともなる令和 4 年度には、「劇場のサポーター、応援団となっていただく」という友の会の本来の設立趣旨に立ち返り、友の会の会員を対象としたバックステージツアーの開催等、劇場そのものへの理解を深め、愛着を持っていただく企画を立ち上げていく予定である。